日本山岳會 會報 主要目録

一号―一〇〇号（自昭和五年十月 至昭和十五年十二月）

一 論説・随想……1
二 研究……3
三 紀行・通信……6
四 調査消息……8
五 ヒマラヤ関係……9
六 遭難報告……10
七 図書紹介……11
八 集会記事……12

（目録中の各項目の数字は号数を示す）

一 論説・随想

山の空　槇有恒　一
ビルゲリーと山スキー　浦松佐美太郎　一
旅人としての田山花袋　伊藤秀五郎　二
或る山小屋　松方三郎　二
去つてゆく人々　小島烏水　三
二十六年を迎へて　浦松佐美太郎　四
老登山家の書簡　藤島敏男　五
「山岳」の記事　藤島敏男　六
二つの声　冠松次郎　八
島の心　岡田喜一　一〇
老兵の嘉門治物語　高野鷹蔵　一一
山は近づく　藤島敏男　一二
岩登りの思ひ出　武田久吉　一四
彦一の思出　浦松佐美太郎　一四
日本山嶽志の編輯印刷の時に困つた談　高頭仁兵衛　一四
大菩薩の山々　松井幹雄　一五
飛騨笠ケ岳　小島烏水　一六
金峯山　木暮理太郎　一七
水の力　冠松次郎　一八
閑窓記　伊藤秀五郎　一九
「道具オンチ」　松方三郎　二二
欠けてゐるもの　浦松佐美太郎　二三
山小舎に泊る　藤島敏男　三〜三四
山と実生活　額田敏　二四
紀行文雑感　細野重雄　二四
伝説から守るために　福島昌夫　二五
風景描写など　桑原武夫　二五
後立山雑考　冠松次郎　二五
秩父と其の山村　原全教　二五
山の方言採集のために　高橋文太郎　二六
「高山深谷」の話　高野鷹蔵　二七
フラグメンテ　荒井道太郎　二七
盤梯山　辻村太郎　二八
会報拡張すべし　藤島敏男　二八
紙魚こぼれ　木暮理太郎　二九
槍ケ岳登山以前　小島烏水　三〇
『山岳』の定まる迄　武田久吉　三〇
木曾御岳の話　木暮理太郎　三一
日本山嶽志のことども　高頭仁兵衛　三一
山の思出　高野鷹蔵　三一
思ひ出話　藤島敏男　三一
スキー漫語　冠松次郎　三一
冬山の危険　額田敏　三二
会と会員　藤島敏男　三三
酸素吸入器と孵卵器　松方三郎　三四
山岳博物館とレリーフ　高橋健治　三四
エヴエレスト探険難　藤木九三　三五
木曾川と利根川と　別所梅之助　三五
欲しいこと、欲しいもの　荒井道太郎　三五
山岳文学を想ふ　荒井道太郎　三六
ウエストン氏と嘉門次翁との思ひ出　辻荘一　三七
山の諸雑誌に対して　高橋健治　三七
ロンドン便り　石川欣一　三八
山の風致と登山者の風紀　宮崎武夫　三八
山岳会への註文一つ　浦松佐美太郎　三九
北千島行前後　伊藤秀五郎　三九
風景　田辺主計　四〇
故辻村伊助と善光寺名所図会　小島烏水　四一
倫敦だより　石川欣一　四二
山でうたふ歌　早川義郎　四三
登山とスキー競技　加納一郎　四四
図書展覧会の為めに　松方三郎　四五
札幌の冬と春　初見一雄　四五
山民の言葉から　高橋文太郎　四六
東北の山　藤島敏男　四六
図書展覧会の記　島田巽　四六
尾瀬水電とケーブルカー問題　小島烏水　五〇
富士ケーブルカー反対　武田久吉　五〇
風景地の保護と国民の自覚　松方三郎　五〇
「他山の石」　初見一雄　五〇
札幌の夏と秋　石川欣一　五一
大町便り　山口秀次郎　五一
会歌制定の提唱　田中薫　五二
山と社会人と学生　松方三郎　五三
紙上遭難頻々　初見一雄　五三
北海道の海岸その他　松方三郎　五四
逝ける文相　浦松佐美太郎　五四
甘い酒・苦い酒　松方三郎　五五
国策の見地　中村清太郎　五五
日本山岳画協会の創立に就て

地元の純情　渡辺公平　五五
ファンクの来朝　中屋健弐　五五
スキーツーア主催者に望む　中屋健弐　五六
登山者の倫理と山の性格　浦松佐美太郎　五六
山小屋の遭難　角田吉夫　五七
五月のメドレイ　尾崎喜八　五七
雑誌山岳の化粧裁希望　犬飼哲夫　五七
登山と機密保護　細井吉造　五八
小屋焼失事件感想　松方三郎　五八
富士ケーブルカー問題解決す　松方三郎　五九
「アイガー北壁登る可らず」　O S O　五九
池田小屋　松方三郎　六〇
故郷の山　深田久弥　六一
Adventure Books　田辺主計　六一
一発の実弾　石原巌　六二
ヴィロの遺稿集　黒田孝雄　六二
オリムピック山岳賞を続りて　田口一郎　六三
新年便り　茨木猪之吉　六三
アルプスの廻り合ひ　松方三郎　六三
映画「ヒマラヤに挑戦して」を見る　松方三郎　六三
遠征と地学者と背景　黒田孝雄　六四
ウエストン氏への便り　松方三郎　六五
銀　鞍　黒田孝雄　六五
山の絵　田口一郎　六七
ウエストン師の叙勲　黒田孝雄　六八
岩を求めて　黒田孝雄　六八
「ヌルサン」　浜野正男　六九
ウエストン師浮彫胸像の建立　槇有恒　六九
山の絵のために　高橋文太郎　七〇
神河内の模型　黒田孝雄　七〇
柳本経武君を偲ぶ　茨木猪之吉　七〇
山の手帳から　吉沢一郎　七〇
登山と報国　冠松次郎　七一
日本山岳会事務所よりの懐古　小島烏水　七四
「事務所よりの懐古」補遺　木暮理太郎　七五
岩小舎　島田武時　七五
小樽の春　坂江善治　七六
欧洲政局と山々　島田巽　七七
浅間山の爆発を見る　岡田要之助　七七
山の絵の伝統　中村清太郎　七八
偶　感　額田敏　七八
時局と登山　吉沢一郎　七九
事変と登山具　西岡一雄　七九
水「ばせを」の絵から　高橋文太郎　八〇
高橋君の本領―「山の人達」を読んで　黒田孝雄　八〇
「山の人達」の批評　浦松佐美太郎　八〇
プロモントアール小舎の一夜　谷博　八〇
「山岳と会報」を見て　額田敏　八〇
反射と屈折　広瀬潔　八二
一異見　津島生　八二
支那事変と登山限界　冠松次郎　八三
出版の苦悩　武田久吉　八四
吾が山岳画道　中村清太郎　八五
あざらし　石原巌　八五
山で拾った話　藤島敏男　八五
樺太の自然と人　初見一雄　八五
故沢田武太郎君を憶ふ　広瀬寿雄　八五
偶　感　黒田孝雄　八六
田中阿歌麿先生古稀祝賀　小島烏水　八七
新幕の湯の老夫婦　菊地孝　八七
河野先生を憶ふ　武田鎌次郎　八七
無　題　加納一郎　八八
私の山行き　石田嘉郎　八八
海外遠征の実現性　藤島敏男　八九
その後の「浮彫」　黒田孝雄　八九
熊の爪跡　広瀬潔　九〇
熊の爪跡（続）　広瀬潔　九一
スキーの楽しみを草に求める　石田嘉郎　九一
故赤羽良一君を憶ふ　茨木猪之吉　九一
熊の爪跡（続）　広瀬潔　九三
山想堂雑記　島田武時　九三
北謙の多門治氏逝く　小野幸　九三
辻本満丸君逝く　木暮理太郎　九四
C・G・ブルースの死を悼む　吉沢一郎　九五
偶　感　藤島敏男　九六
甲斐駒（絵と文）　古田彰　九六
小森宮章正君を偲ぶ　金山淳二　九六
独り旅　山田奈良雄　九六
若尾金造氏を悼む　冠松次郎　九七
辻本満丸氏とスクアレン　湯浅巌　九九
タイヤルの印象　小国達雄　九九
百号の辞　冠松次郎　一〇〇
日本山岳聯盟の結成を前にして　額田敏　一〇〇
時勢と山岳会　中村謙　一〇〇
登山大衆と其の指導　富田健一　一〇〇
日本山岳会の行方　小池文雄　一〇〇
ペンケパンケ　武田久吉　一〇〇
富士の御額　吉沢生　一〇〇
尾瀬の問題　一〇〇

二　研　究

山麓民の気象観測　角田吉夫　七
立山累年気象観測成績　加納一郎　七
九重山と久住山　竹内亮　九
ゾーム式の海豹皮に就て　浦松佐美太郎　一二
一ノ倉の文字に就て　角田吉夫　一三
山岳写真　岩永信雄　一四
ゾーム式海豹皮に就て　黒田鎮夫　一四
アフリカの天然に関する文献　八代準　一六
Z'mutgrat 断片　吉沢一郎　二〇
食料の研究　長沢佳熊　二〇
高山登攀と酸素と　渡辺漸　二一
マンメリーの最期を憶ふ　藤島敏男　二一
アルコールコンロ　初見一雄　二一
山岳研究講話　1―8　今西錦司　三―三
外ノ川小屋付近のルートについて　吉沢一郎　二二
コバに就て　細野重雄　二二
スチールエッヂスキー一考察　三沢竜雄　二二
魔法瓶の携行法に就て　額田敏　二二
山岳救難機関に就て　瀬木三雄　二三
山地スキー術私見　今西錦司　三―四
魔法瓶に就て　角田吉夫　二三

コバの資料報告　磯貝　勇　二四
再びテルモスの保護について　角田吉夫　二四
アルパインクラシクスの追憶　島田巽　三五～三七
マッターホルン東面攻撃とパーカー兄弟の登山史上に於ける功績　吉沢一郎　二五
山岳語彙（九州地方）　二五
登山用具重量表（三沢氏調）　角田吉夫　二五
ババリア隊カンチェンジュンガに於て写した写真　額田敏　二七
山岳語彙（東北地方）　藤島敏男　二七
登山経歴表について　黒田孝雄　二八
各国山岳界の近況　黒田孝雄　二九
遭難報告に就ての希望　瀬木三雄　二九
千島の気象に関する文献　荒川秀俊　二九
耶馬渓地方の山村語二三　竹内亮　三一
靴と糠　O生　三一
自熱罐詰　額田敏　三二
カンダハールビンドゥング　武田久吉　三三
一九三二年のミニヤゴンカ登攀　黒田孝雄　三四
発汗防止に関する一つの提察　戸塚武彦　三六
日本アルプスといふ言葉に就いて　吉岡春之助　三六
南島に於けるコバの方言その他　高橋文太郎　三七
山岳撮影と赤外線フイルムの新製　額田敏　三七
飲料用食塩水に就て　谷博　三八
羽根布団　初見一雄　三九
再び南島コバのこと　高橋文太郎　三九
四国地方のコバと山岳語　磯貝勇　三九
凍死か疲労死か　谷博　四〇
第四次エヴェレスト遠征隊の装備　藤島敏男　四一
台湾に於ける山旅の準備に就て　田中薫　四一
ブロッケンの怪　浦松佐美太郎　四二
「ブロッケンの怪」に答ふ　藤木九三　四二
問題の解説　浦松佐美太郎　四二
スキー術の解説に就ての疑問　大村郡次郎　四三
クレッテライの新可能性　丸岡誠幸　四三
山岳遭難救助機関案懸賞募集趣意書　吉沢一郎　四八
三段峡の危期　戸塚武彦　四九
富士山頂に滞在して　五〇
富田節斎翁と信濃国、穂高嶽池之図社　笠原烏丸　五一
松室了廓居士の鞍嶺五首　笠原烏丸　五一
ヨーデルンと山伏の法螺の貝　辻荘一　五二
チャチャヌプリの初登山者　佐々保雄　五二
船来背負ひ子　松方三郎　五三
「雪崩」に対する批判に答ふ　黒田正夫　五三
アイヌのシュトウとテシマについて　高橋文太郎　五四
御鷹山のこと　島田武時　五四
南洋委任統治諸島の山々　行方沼東　五五
円型天幕一試作品　田中太郎　五五
地図整理の一方法　法貴六衛　五七
登山と通信連絡　中島博美　五九
忘却された山岳人　島田巽　六〇
川海苔　岡田喜一　六一
「南極記」その他　島田巽　六二
松倉ヒュッテとその近傍　島田武時　六四
山の民具　磯貝勇　六五
遠征と地形測量　額田敏　六五
ウエストンと同時代の一外人登山　行方沼東　六八
山登りについて(一)―(四)(ヤング)　黒田孝雄　六九～七三
日本山岳会誕生の年月　武田久吉　七二
「利根川図志」の著者赤松宗旦義知のこと　行方沼東　七二
岩波版「日本風景論」に就いて　小島烏水　七三
ウェンバーの刻んだ日本の風景　武田久吉　七三
日本山岳会誕生の年月に就て　冠松次郎　七三
山岳書とデディケーション　小林義正　七四
初期アルプス描写家たち　高橋文太郎　七四
ウイムパアの刻んだ日本風景に就いて　小島烏水　七五
山のわらぢ　向山雅重　七五
かまぼこ型冬季天幕の一試作　福田嘉四郎　七六
山の名・山の地名(一)(二)(三)(四)　白馬耕　七八～七九　七九～九六
エリブルース　袋一平　八〇
西欧山岳文献の翻訳　藤島敏男　八一
白馬雑談　中島杏子　八二
山岳語彙蒐集について　高橋文太郎　八三
八幡製鉄所に於ける集団登山の近況　橋本三八　八三
J. Norman Collie氏のアルバム　島田武時　八三
御岳の気象的位置　青木昇　八四
テムポ・シュヴング私見　青木昇　八四
石徹白の山　谷博　八五
探検家の生涯　加納一郎　八六
地名小記　武田久吉　八六
山の蒐書入門　中島杏子　八六
山の蒐書入門(続)　中島杏子　八七
再び山を画いた遺品に就て　中村清太郎　八八
八幡製鉄所「山の家」　橋本三八　八九
スキーワックスの試製　額田敏　九〇
三石山と羊歯　行方沼東　九二
富士ヒュッテと愛鷹山荘　冠松次郎　九二
犬橇　宮崎武夫　九四
槍平小屋の半壊について　橋本公久　九四
民族の足　水野祥太郎　九七

三紀行・通信

聖、赤石　渡辺公平　一
チロール、チラータール　矢田誠太郎　一
ノールウェイ　矢田誠太郎　一
スウイス　田中薫　一
秋の見聞二三　冠松次郎　一
越後の初雪と二王子岳　藤島玄　二
美ヶ原と霧ヶ峯の小屋　角田吉夫　二
富士山　松方三郎　二
カシミール　曾原喜久蔵　三
ピレネー　日高信六郎　三
カナダ　沼井鉄太郎　三
英国より　Walter Weston　三
阿里山より　武田久吉　四
冬の大井川　冠松次郎　四
一月の苗場山　角田吉夫　四
発哺温泉から　藤島敏男　四

ノールウェイ　大島　永明　四
吾　妻　山　黒田　正夫　五
上州鹿沢温泉　藤島　敏男　五
渋峠・熊の湯・志賀高原　松本　善二　六
五色・青木小屋より　島　田　巽　六
南駒より　小池　文雄　六
四月の上高地方面　角田　吉夫　七
月山スキー行　藤島　敏男　七
那　須　大平　晟　九
鳳凰、薬師　茨木猪之吉　九
上高地より中房へ　朝輝記太留　九
北岳より赤石へ　山田　多市　九
大覇より次高へ　北田　正三　九
北千島旅行々程略記　岡田　喜一　一〇
赤城の秋　大平　晟　一〇
武尊山　山田　多市　一〇
苗場山より野反池へ　藤島　敏男　一〇
瑞西だより　山崎　春雄　一〇
富士山の山小屋　角田　吉夫　一一
鹿島のカクネ里　京大旅行部　一一
秋の山ふたつ　田中・藤島　一一
那須より　石塚　秀次郎　一一
シカゴより　東　良三　一一
富士山　京大旅行部　一二
台湾山岳界近況　沼井　鉄太郎　一二
穂高行　長沢　佳熊　一三
冬の尾瀬・毛度沢小屋　藤島　敏男　一三
冬の木曾御岳　三谷　慶三　一三
二月の富士山　額田　敏　一三
鹿沢温泉より　戸塚　武彦　一三
白馬より　黒田　正夫　一三
巻機山、牛ケ岳　藤島　敏男　一四
三月の薬師より　島田　武時　一四
台湾便り　沼井　鉄太郎　一四
早春の猿倉小屋より　田中　薫　一五
旅　信　下岡　忠一　一五
東北朝日岳　田中　菅雄　一五
万太郎山　藤島　敏男　一五

白馬のたより　冠　松次郎　一五
残雪の守門　小杉　源吉　一六
新緑の木曾路より　茨木猪之吉　一六
立山薬師—槍スキー行　高田　茂　一六
花蓮港より　沼井　鉄太郎　一六
戸隠と飯綱山　小杉　源吉　一七
狩小屋沢から至仏山　小杉　源吉　一七
台湾だより　沼井　鉄太郎　一七
朝鮮・金剛山より　塚本　閣治　一七
初夏の奥上州　角田　吉夫　一七
両神山　吉田　竹志　一七
九州の山の消息　竹内　亮　一八
利根川水長沢　角田　吉夫　一八
飯豊山近況　島田　巽　一八
早月尾根　吉田　喜久治　一八
千枚尾根より赤石岳へ　中根　経三　一八
北アルプス絵行脚　茨木猪之吉　一八
高瀬入り北鎌登攀　亀山　雄四郎　一八
穂高の岩場　島田　武時　一八
芦安口より白峯へ　小島　一祐　一八
木曾御岳より北アルプスへ　増井　一彦　一八
八海山より　安田　登茂次　一八
白山の旅　安田　登茂次　一八
鹿島川より冷池に至る　吹原　不二雄　一九
九州ところどころ　伊藤　秀五郎　一九
雨の日光より　茨木猪之吉　一九
飛騨の四日　今西　錦司　二〇
白山の山小屋　中野　正英　二〇
穂高へ　冠　松次郎　二〇
銀山平より尾瀬沼へ　三溝　貞之助　二〇
北海道より　徳永　正雄　二一
台湾清水山　沼井　鉄太郎　二一
穂高白出沢より　島田　武時　二一
日光湯本にて　伊東　虎夫　二一
鳥帽子東沢赤牛岳　小池　文雄　二一
冬の鳥海　田中　菅雄　二一
外ノ川小屋付近のスキールート　吉沢　一郎　二一
乗鞍と霧ケ峯　田中　薫　二三

一月浅間スキー登山　小池　文雄　二三
発哺野沢間のスキーツーア　関　金次郎　二四
北海道より　佐々　保雄　二四
陸羽駒ケ岳　藤島　敏男　二四
外ノ川小屋　松木　謙三　二四
青木小屋より沼尻へ　細野喜代三郎　二四
御岳へ　坂江　善治　二四
早春蔵王日記　角田　吉夫　二五
冬の富士　広瀬　潔　二五
早月尾根　田中　生　二五
北海道より　堀岡　清　二五
北アルプスだより　小池　文雄　二五
三国川より中ノ岳へ　坂江　善治　二五
八幡平、岩木山、鳥海山　藤島　敏男　二五
印度だより　曾原　喜久蔵　二五
八甲田山　藤島　敏男　二七
台湾近況　沼井　鉄太郎　二八
剣岳に於ける女学生団体登山の成功　朝輝記太留　二八
九州便り　月原　俊二　二八
八溝山より高笹山へ　行方　沼東　二八
大佐飛山　加藤　恭平　二八
白根山庚甲山縦走録　浅野　松蔵　二八
旅　信　磯野　計蔵　二八
台湾より　田中　薫　二九
清津川、佐武流、白砂山　内藤　八郎　二九
大滝根より万太郎へ　行方　沼東　三〇
新雪の富士行　額田　敏　三〇
乗鞍岳位ケ原に於ける雪崩発生報告　沢柳　誠四郎　三二
富士山行　加藤　恭平　三二
氷ノ山、単独行　石原　正生　三二
台湾行　鹿野　忠雄　三二
与作さんの死　児島　勘次　三二
黒部保勝運動に就て　冠　松次郎　三三
上信国境の縦走　角田　吉夫　三四
今春の剣岳　立教山岳部　三五
四月末の薬師岳　田辺　主計　三五

春のスキー行　三高山岳部　三五
帝釈山脈の紹介　永楽孝一　三六
仙ノ倉沢の山小屋に就て　吉岡春之助　三八
スゴウ乗越及太郎平の小屋の位置に就いて　笠原鉄太郎　三八
その日の鷲ケ峯　月原俊二　三八
立山より　山田多市　三八
北鮮の山歩き短報　児島勘次　三九
立山より　島田武時　三九
同　岩永信雄　三九
績北鮮の山歩き短報　児島勘次　四〇
立山天狗平の小屋に就て　杉山良平　四二
東沢と黒岳　小池文雄　四二
白頭山麓より　北田正三　四二
冬期雪嶺山脈登攀報告　黒田正夫　四三
白馬行　長沢佳熊　四三
甲斐駒ケ岳　早川安治　四三
北海道に於ける冬期登山の近況　犬飼哲夫　四四
鳳凰山　早川安治　四四
冬・春の収穫より　立教山岳部　四五
白木山に登る　吉沢一郎　四六
農鳥岳　早川安治　四六
五月の山歩き　田辺主計　四七
天神峠の新道　吉沢一郎　四八
アメリカ便り　藤島・伊藤　四八
富士ケーブルカーに就て　手塚宏寿　五〇
択捉島便り　田中薫　五〇
秋の剣より　島田武時　五〇
新雪の薬師より　岩永信雄　五一
十一月の富士　宮崎健一　五二
新雪の立山　島田武時　五二
東北朝日　岡田義雄　五三
元旦の新高山　伊藤彦一　五三
奥又白の冬営　小池文雄　五四
鹿島便り　湯浅巌　五四
興安嶺遠征隊から　京都帝大遠征隊　五四
樺太遠征隊から　三崎篤　五四
春期台湾遠征　神戸商大山岳部　五四

灘スキー場　谷博　五五
雪の北平　伊藤愿　五六
春の蔵王山と吾妻山　額田敏　五六
春の遠見尾根　岡田美雄　五六
春の朝日岳　河野齢蔵　五七
豊科町登山遭難者慰霊祭　入江保太　五七
雪の阿頼度富士　京大旅行部　五七
春の富士大沢　小池文雄　五七
餓鬼岳天幕行
コーボルト・ヒュッテ閉鎖に関する声明　山形高校山岳部　五七
台湾遠征隊帰還　神戸商大山岳部　五七
白馬より小川温泉へ　田辺主計　五八
九州便り　月原生　五八
早月尾根　岩永信雄　六〇
印度から　伊藤愿　六〇
八十里越　桜井信雄　六〇
御中道　松方三郎　六〇
富士山ケーブル問題　手塚宏寿　六一
同　高原正作　六一
穂高小屋　今田重太郎　六一
グリンデルワルドから　藤島敏男　六一
山案内佐伯八郎君の死と其前後事情　石黒清蔵　六二
塩島鎰司君の死を悼む　冠松次郎　六二
木暮会長を迎へて　佐々保雄　六二
巴里便り　藤島敏男　六三
山海関から　阿部壮太郎　六三
野地温泉　早川義郎　六三
乗鞍岳　中司文夫　六三
冬の北海道　田口一郎　六三
早池峯山　角田吉夫　六三
野沢の今昔　吉沢一郎　六四
富士山大沢口合宿報告　東京帝大山岳部　六四
正月スキー合宿　中村テル　六四
滑川　谷本光典　六五
二月の唐松岳行　交野武一　六五
北海道　石原巌　六五

満州便り　石黒清蔵　六五
笠ケ岳へ　小池文雄　六五
三つの報告　北大山岳部　東京商大山岳部　東京帝大山岳部　六六
双六池小屋へ（四月）　田辺主計　六六
立山だより　富田健一　六六
山・郷土　塩田輔雄　六七
伯耆大山　杉本俊二　六九
北岳・間ノ岳・農鳥岳　中島精一　六九
北支便り　松方三郎　七〇
戦線より　中屋健弐　七〇
巴里便り　藤島敏男　七一
蒙古の平原へ　渡辺公平　七一
厳冬の奥秩父　茨木猪之吉　七三
摺古木山　谷博　七三
上海戦線より　岡本勝二　七三
富士山　小池文雄　七三
正月の富士行　名須川渡　七三
冬山通信　額田敏　七三
美ケ原から蓼科高原　中村謙　七三
正月の伯耆大山だより　橋本三八　七三
北京便り　松方三郎　七三
北支戦線より　渡辺公平　七四
春山報告　東京商大山岳部　七六
雨飾行　田辺主計　七六
台湾の山の報告（北大山岳部）　岡彦一　七七
巴里から　藤島敏男　七七
穴毛谷の数日　小池文雄　七七
北支より　岡本勝二　七七
北支より　渡辺公平　七七
ウエストン氏よりの便り　Walter Weston　七八
耳二つ、茂倉、武能小屋　P・M生　七八
神河内状況報告　東京商大山岳部　七八
立山地方事情　石黒清蔵　七八
珍らしい対面　茨木猪之吉　七九
スイスだより　田口一郎・二郎　七九
南洋より　岡彦一　七九

兵営より　浜野　正男　七九
雨の武尊山　吉沢　一郎　七九
伊奈川と中御所谷　吉沢　一郎　七九
大別山麓にて　北田　正三　七九
香港へ　中屋　健弐　七九
スイスから　田口　一郎　八〇
三軒茶屋より　浜野　正男　八〇
四国の山　宮崎　健一　八〇
九州から　石田　嘉郎　八〇
「包」便り　浅井東一・他　八〇
御座山　望月　達夫　八一
故辻村伊助氏の邸跡を訪ふ　福田　嘉四郎　八一
二つの遡行（大蛇尾川と滑河内）　I・Y生　八二
会を去るに当って　S・M生　八二
京大調査隊帰国　京大内蒙古学術調査隊　八二
大同便り　渡辺　公平　八三
日本山岳会への希望　藤村　泰三　八三
漢口より　北田　正三　八三
陣中クリームの秘法公開　渡辺　公平　八三
木曾駒と私達　跡部　昌三　八四
奥秩父の南部　小野　幸　八四
茅戸行　熊　一平　八四
鳩ケ峯と北葛岳　小池　文雄　八四
一月の八方尾根　名須川　渡　八四
蔵王高湯の一週間　吉沢　一郎　八四
スキー行二つ　田辺　主計　八五
雪の大河原峠越え　藤川　高　八五
宛名のない手紙　北九州一会員　八五
グリンデルワルドにて　田口　一郎　八五
智異山　佐藤　テル　八五
冬富士滞頂　広瀬　潔　八五
隊名変更　浜野　正男　八六
江南の早春　北田　正三　八六
朝鮮へ　茨木猪之吉　八六
遠見から八方尾根　小倉　志郎　八六
岩菅山を経て苗場山に　松久　明義　八六
春の笛ケ峰　藤島　敏男　八六
春の吾妻山　吉沢　一郎　八六
大滝根山　中村　謙　八七
新緑の金剛山　茨木猪之吉　八七
積雪期木曾駒に於ける二つの行為　小島　政士　跡部　昌三　八七
八方尾根から五竜へ　野口　末延　八七
伯林より　高木　正孝　八七
戦線便り　斎藤　松太郎　八八
戦線便り　豊田　春満　八八
戦線便り　佐藤　貞吉　八八
赤久縄山　望月　達夫　八九
北京より　島田　巽　八九
蒙疆の秋　渡辺　公平　八九
山だより　中村　謙　九〇
赤倉と熊の湯　伊藤　政市　九〇
金時山　吉沢　一郎　九〇
札幌から　中野　征紀　九〇
白山　石原　正直　九〇
尾瀬の秋　藤島　敏男　九〇
鳥甲山　長尾　宏也　九一
白馬岳主稜　谷　博　九一
雲取から氷川へ　吉沢　一郎　九一
十一月の毛勝岳　岩永　信雄　九一
六ツ石から鷹ノ巣へ　石塚　秀次郎　九一
山西省境　渡辺　公平　九二
有峰より平湯への田舎道　田辺　主計　九二
安倍峠　藤島　敏男　九二
熊本より　坂江　善治　九二
太平洋上より　東　良三　九二
空いてるスキー地　藤島　敏男　九二
木曾駒連峰と私達（十四年報告）　跡部　昌三　九三
奥日光便り　広瀬　潔　九三
熊の湯にて　伊藤　政市　九三
中支戦線より　浜野　正男　九三
北支だより　飛川　維之　九三
祖母山行き　石田　嘉郎　九三
北海道の旅　富田　健一　九三
春の白馬頂上より糸魚川へ　盛岡　英治郎　九四
大滝山東側と乗鞍岳から白船温泉へ　田辺　主計　九四
春の野反池　中村　謙　九五
小川山、釜瀬本谷　小野　幸　九五
ドイツ便り　高木　正孝　九五
北支便り　渡辺　公平　九五
南支便り　松山　武貞　九五
初夏の櫛形山へ　吉沢　一郎　九六
春の尾瀬　島田　巽　九六
蒙疆より　北田　正三　九六
中支便り　浜野　正男　九六
会員通信　柳田　国男　九六
サギタル　跡部　昌三　九七
吉野群山に入る　橋本　三八　九七
瑞西だより　田口　一郎　九七
兵営だより　今川　良雄　九七
中支だより　浜野　正男　九七
木曾駒　山本　敏三　九七
赤石・塩見・転付峠　青木　昇　九七
朝日岳登山道の荒廃　塚本　繁松　九八
夏山だより　中村　謙　九八
夏の山旅から　盛岡　英治郎　九八
広島にて　渡辺　公平　九八
天津にて　吉阪　隆正　九八
沼田街道　茨木猪之吉　九八
南支便り　松山　武貞　九八
熱河の山　竹内　亮　九九
忠別岳の雪穴生活　寺田　彦次　一〇〇
内蒙紀行　名須川　渡　一〇〇
八ケ岳の東面径路に就て　吉沢　一郎　一〇〇
秋の神河内より大滝山へ　吉田　竹志　一〇〇
松本から高山（久々野）へ　田辺　主計　一〇〇
広東より　藤島　敏男　一〇〇
木曾谷にて　茨木猪之吉　一〇〇
北支より　井上　英夫　一〇〇
紅葉の天城山　中村　謙　一〇〇

四　調査・消息

（イ）
山の方言　二
冬の山小屋　二
山小屋、山案内調査報告　四
山小屋新設　四
北アルプスにスキーコースと山小屋の計画　六
立山案内人組合長の更迭　六
日本北アルプス登山協議会　七
山小屋新設　一〇
登山団体調査表発送　一〇
冬山の消息　一一
片品村案内料金　一二
新設山小屋　一二
北アルプス便り　一五
（新設山小屋・山案内料金）　一五
山案内人遺族救済に就て　一五
南アルプス芦安口（自動車便）　一六
自動車開通　一七
上越の山案内料金　一七
上越の山に新道　一七
昭和医専山岳無料診療所　一七
登山団体調査追加　一九～二三、二九、三六、四〇
山の消息（虹芝寮外）　二〇
白山の山小屋　二〇
唐松岳に山小屋　二〇
鳴川の小舎　二一
今冬の山小屋調査　二一
山の消息　二二
地形図の誤り訂正　二二
スクラップより　二三
山小屋通信　二三
白樺小屋公開禁止　二四
スクラップより　二四
谷川岳付近のニュース　二七
魚沼駒の新設小屋　二八
新設山小屋　二九
秋山のニュース　二九
今冬の山小屋調査　三〇
山の消息　三一
山小屋便り　三六
新設山小屋　四〇
黒部仙人谷登路の新設　四八
山小屋新設　五〇
（ロ）
関東学生登山連盟消息　一、三
関西学生山岳連盟消息　一、二、三
関東学生登山連盟解散声明書　一、二
R・C・C秋季総会　一
神戸徒歩会　一
福岡山岳談話会　二、五、六
越後山岳会　二
英国王立地学協会百年祭　三
カメット登攀隊　三
カンチェンジュンガ　四
台湾山地測量の功労者野呂寧氏の訃　五
辻村太郎氏の外遊　一〇
朝鮮山岳会の設立　一五
茨木氏山岳画個人展　一六
福岡県体育協会第二回登山講習会　一八
福岡山の会成る　一八
第四回エヴェレスト・エキスペディション　二〇
茨木氏の大阪個人展　二〇
エヴェレスト登山禁止令　三四
冬期白頭山登山計画　四一
セガンチニ原色版画の寄贈　四四
藤島敏男氏渡仏　四五
一九三六年英国ヒマラヤ登山隊カルカッタ着　四七
（ハ）付　録
日本山岳会図書室所蔵図書目録
和書之部　第一輯　付、一九
同　第二輯　付、二〇
洋書之部　付、二四
登山関係自動車便調査（Ⅰ）　付、四六
同（Ⅱ）　付、四八
山の消息　五二
氷雪期富士登山者の一統計に（広瀬潔）　五三
山岳遭難救助機関案懸賞募集報告　五三
第三回山岳懇談会　五四
日本山岳画協会成立　五五
穂高小屋焼失報告　五八
山の便り　五八
阿頼度富士登攀成功　五八
富士山頂観測所の移転　五九
更生する穂高小屋　五九
二高清渓小屋　六〇
関西支部室にアルパイン・ジャーナル完備　六一
白瀬中尉講演会　六二
南極探検隊事蹟概要（記念碑碑文）　六二
山岳語彙の蒐集に就て　六二
ウエストン師の寿像建設について　六八
山岳語彙の蒐集について　六九
長野県主催の登山講演会に就て　七二
積雪の分類及名称に関する決議　七二
軍機保護法の施行と撮影等の注意（一）―（三）　七八～八〇
夏山情報　七八
「山岳」バックナンバー最後的頒売　七九
日本雪氷協会の創立（黒田正夫）　八五
本年度の「山日記」に就て（額田）　八七
涸沢小屋（小谷部）　九〇
日光の山小屋（学習院輔仁会山岳部）　九一
八幡製鉄所「尺岳山の家」焼失に就て（藤崎生）　九一
尺岳山の家焼失に就て藤崎氏に答ふ（爪生正）　九二
武能小屋の倒壊　九二
夏山情報（昭和十五年）　九五
山岳部欄（早大・東商大）　九五
京浜山岳団体連合会の結成　九六
谷川岳山小屋建設の後援　九六
「登山家の標準に段」なる記事に就て　九七
山岳部欄（早大・法政大）　九七
山岳部欄（東京帝大）　九八
ウエストン師逝去本会弔電に対する英国山岳会よりの謝礼状　九九

ヘルベチア・ヒュッテ閉鎖さる　九九
百間洞「山の家」新設　九九
谷川岳の指導標完工　九九
トムラウシ山小屋の新設　一〇〇
白樺ヒュッテの公開（文理大山岳部）　一〇〇
日本山岳連盟結成運動経過報告　一〇〇
……
ギド・レイの逝去（島田巽）　五二
イタリア帝国万歳　五九
遠来の訪客　五九
会報六〇号　六〇
関　心　事　六〇
市史稿三十年　六〇
図書棚より　六一
細井吉造君の遺稿集　六二
木暮会長の近況　六八
C・ジョン・モリス氏と語る（槇）　七二
小沢亮君を送る（鳥山）　七七
国際登山連盟の事　七九
小島さんのこと　七九
二つの小さな集ひ　七九
独逸山岳会よりの嬉しい便り　七九
盛岡高等農林学校の団体登山　八〇
ジョン・モリス氏の講演（吉沢生）　八二
高須茂氏の弁　八三
中央大学山岳会の計画（冬山）　八三
シプトンの栄誉　八四
会員岡本勝二君の戦死　九一
雪中戦に不死身　九三
マイエルの死去　九三
名誉会員ウエストン氏の訃　九四
佐伯栄作君の死去　九五
会員高橋鎬三郎氏の訃　九八

五　ヒマラヤ関係

立教のヒマラヤ遠征を聞いて　三田　幸夫　五四
ガルワル遠征　立教大学山岳部　五四
エヴェレストの問題（一九三五年）田口　一郎　五六
ヒマラヤ主要登攀年譜　黒田　孝雄　五六
仏国のヒマラヤ遠征隊　藤島　敏男　五八
ヒマラヤ隊出発　立教大学山岳部　五八
カルカッタから根拠地まで　浜野　正男　六〇
日本式ヒマラヤ登攀　松方　三郎　六一
今シーズンのヒマラヤ　島田　巽　六一
ナンダ・コット登頂　立教大学山岳部　六一
ナンダ・コット遠征終る　浦松佐美太郎　六三
ヒマラヤの登山　田口　一郎　六四
ナンダ・デヴィの教訓　浜野　正男　六四
ナンダ・コートより　六五
一九三七年ナンガ・パルバット登攀隊の顔振れ　島田　巽　六六
ナンダ・デヴィの一挿話　黒田　孝雄　六七
バウアー以後のシッキム登攀　島田　巽　七二
マナ・ピーク登頂　吉阪　隆正　七四
モリス氏の話　七四
バウワア隊ナンガ・パルバットへ　七四
エヴェレスト遠征の省察（ラトレッヂ）　島田　巽　七四～七六
エヴェレスト一九三三年の攻撃（スマイス）（一）―（八）　吉沢　一郎　七五～七六　八二～八四、八六
カラコラム・ヒマラヤの山岳高度表　黒田　孝雄　七七
ダック・バンガローの事ども（一）（二）　湯浅　巌　七六～七七
ヒマラヤ便り　島田　巽　吉沢　一郎　七八
エヴェレストには果して固有なる西蔵名ありや　吉沢　一郎　七八
ナンガ・パルバット　吉沢　一郎　七九
仏国のヒマラヤ遠征費　藤島　敏男　七九
カラコラム遠征資料　藤島　敏男　八〇
ヒマラヤン・ニュース　望月　達夫　八〇
完登の七千米突級　吉沢　一郎　八一
ヒマラヤ八千米級へ遠征隊を派遣するに到るまで　吉阪　隆正　八三
ヒマラヤ及カラコラム主要山岳図　吉沢　一郎　八三
ヒマラヤン・ニュース　吉沢　一郎　八五
瑞西ガルワール・ヒマラヤ遠征（一九三九年）　吉沢　一郎　八七
雲南の雪山（K・ワード）　望月　達夫　八八
独逸ガルワール遠征（一九三八年）　望月　達夫　八九
K2遠征の一挿話　吉沢　一郎　九〇
冬のゼム氷河付近（ハント、クック）（一）―（四）　望月　達夫　九〇～九三
瑞西ヒマラヤ遠征隊の行動（ガルワール）　吉沢　一郎　九一
カラコラム遠征（探検・踏査・登山）年譜　吉沢　一郎　九三
ヒマラヤン・ニュース（切抜帳）　九三
一九三九年年カラコラム踏査行（シプトン）　望月　達夫　九四
ポーランド遠征隊の悲劇　吉阪　隆正　九五
K2・一九三九年（一）（二）　吉沢　一郎　九七～九八
ソヴエト一登山家の話　袋　一平　一〇〇

六　遭難報告

今夏の遭難者　九
浦高生雪の両神山に遭難　一三
最近の山の遭難概報　一四
会津朝日岳の遭難　一九
秦正二氏の穂高遭難　二〇
木曾駒ケ岳の遭難　二〇
於富士山故土屋勇氏の遭難報告　二二
積雪期に於ける蔵王遭難三件　二四
岩菅スキー登山遭難　二五
後立山の遭難　二九
奥穂高の遭難　二九
鈴木保衛氏の穂高に於ける遭難　三〇
日光雲竜渓の遭難　三一
堀保美氏の富士の遭難　四一
佐伯宗作の遭難　四六
京大旅行部員飯田稔君の遭難　五九
細井君を悼む　六一
北大山岳部員二氏の上ホロカメットクに於ける遭難　八四

富士で顚落絶命　九二
吾妻山中で遭難　九二
朝日岳の遭難　九二
ペテガリ岳遭難　九二
ペテガリ隊の遭難に就て（北大山岳部）　九三
栂池小屋付近に於ける表層雪崩遭難に就て（石原巌）　九三
前穂高奥又白に於ける遭難に就いて（松本高校山岳部）　九四
北九州、薄霧山で遭難（月原俊二）　九四
前穂高に於ける遭難に就て（日本大学山岳部）　九九
白馬岳南股奥に於ける遭難に就て（大阪高等学校旅行部）　九九

七　図書紹介

関西学生山岳連盟報告　第一号　二
de Lepiney, Sur les arêtes du Mont Blanc, 1929　二
Rey, Alpinisme Acrobatique, 1929　二
Gaillard, L'Aiguille de Bionnassay, 1929　二
スキーの山旅（田部重治）　三
Smythe, The Kangchenjunga Adventure　三
Tyler, Alpine Passes　三
de Beer, Early Travellers in the Alps.　三
Lunn, The Complete Ski-runner.　三
Bauer, Im Kampf um den Himalaya　三
Fitz Gerald, Climbs in the New Zealand Alps　五
Akademischer Alpenclub Bern　五
日本地図測量小史（高木菊三郎）　五
剣沢に逝ける人々（東京帝大山の会）　五
山岳篇・日本アルプス　五
案内人手帳　七
Schwarz, Et La Montagne Conguit l'Omme.　七
Palmer & Thorington, A Climbers, Guide to the Rocky Mountains of Canada.　七
Muller, They Climbed the Alps.　七
峠と高原（田部重治）　八
南アルプスと其渓谷（平賀文男）　八
東京付近の山々（河田楨、高畑棟材）　八
山の手帳　八
登山とキャンピング（熊沢外四氏）　八
水上競技・ボート・登山（朝日運動部）　八
後立山連峯（冠松次郎）　八
高山植物写真図聚（武田久吉、田辺和雄）　八
富士とアルプス（小松栄）　八
上越国境（角田吉夫）　九
北海道の山岳（井田・坂本・沢本・須藤・館脇・田中・山縣）　九
雲表（藤木九三）　九
憧れのキャンピング（太田行蔵）　九
陸測地形図仮製版「上高地」　一〇
富士山（武田久吉）　一〇
山（井田清）　一〇
山之素描（黒田正夫）　一〇
東京近郊の山と渓（菅沼達太郎）　一〇
アルペンカレンダー（山と渓谷社）　一一
ヒマラヤに挑戦して（バウワー、伊藤愿訳）　一一
Klucker, Adventures of an Alpine Guide　一三
Smythe, Kamet Conquered　一三
登高行　第八年（慶応山岳部）　一三
関東学生登山聯盟報告　第三号　一三
炉辺　第五輯（明大山岳部）　一三
ネーベルメア（東京農大山岳部）　一三
山野スキー術教本（水野祥太郎）　一三
Himalaya Karakorum and Eastern Turkistan　一三
五万分一「金峯山・三峯」新版　一五
五万分一「四万」新版　一五
吾妻・磐梯・五色・沼尻（福島スキー倶楽部）　一六
氷河と万年雪の山（小島烏水）　一六
木曾駒に友をたづねて（大阪工大山岳部）　一六
関西岳聯報告　第三号　一六
山岳服装近代色（菅沼達太郎）　一六
「市野瀬・大河原」新版地図　一六
アルプス原説集（山上雷鳥）　一七
立大山岳部々報　第四号　一七
婦人の山とスキー（黒田初子）　一七
大阿蘇の新研究　一八
山は生きる（今井徹郎）　一八
山の写真のうつし方（手塚順一郎）　一八
九州の山々（北田正三）　一八
山行　第一号（筑紫山岳会）　一八
針葉樹　第六号（東京商大山岳部）　一八
登山術（黒田正夫）　一八
近畿の山と谷（住友山岳会）　一九
チロル伝説集（山上雷鳥）　二〇
山　第一号（YWCA）　二〇
登山とスキー　十一号　二〇
山と渓谷　十六号　二〇
三角点（フアガスクラブ）　二〇
アルパインカレンダー　二〇
新刊地図紹介（十石峠・蓼科山・槍ケ岳・立山・赤石岳）　二〇
秋風帳（柳田国男）　二一
山想日記　二一
Kirkpatrick, Alpine Days and Nights　二二
de Beer, Alps and Men　二二
台湾山岳　第六号　二二
山岳写真のうつし方（額田敏）　二二
スキー（泉掬次郎）　二二
アルペンカレンダー（一九三三年）　二二
Alpine Journal, Nov. 1932　二三
Akademischer Alpenclub, Bern.　二三
柚　第四号　二三
RCC報告　第五号　二三
東大スキー山岳部報告　二三
新版黒部、立山図幅に就いて　二三
山上（奈良山岳会）　二四
岳　第四号（三越山岳会）　二八
三高山岳部報告　第十号　二八
巓　第三年（丸善山岳会）　二八
九州山日記　二八
日本山岳新聞　二八
山想　第四号（法政山岳部）　二九
立教大学山岳部々報　第五号　二九
柚　第五号　三〇

日本アルプスの登山と探検　三〇
北大山岳部々報　第四号　三〇
雪、女性とスキー（黒田米子）　三二
積雪期登山（藤田信道）　三三
スキーツアー（菅沼達太郎）　三四
Schomhug, Peaks and Plaines of Central Asia　三六
Knowlton, The Naked Mountain.　三六
Wessels, The Early Jesuit Travellers in the Central Asia　三六
Heim, Minya Gongkar.　三六
Dainelli, Buddists and Glaciers of Western Tibet.　三六
C. A. F., Mannuel d'Alpinisme　三六
First Over Everest.　三六
登高会々報　第一号　三六
国立公園に立つ山小舎建築設計図案集　三六
紀行と随筆（田部重治）　三七
リュックサック　第七号（早大山岳部）　三七
立教大学山岳部々報　第六号　三七
三高山岳部報告　第十一号　三七
巓　第四号　三八
赤外線写真　三八
年報　第二号（横浜山岳会）　三八
関西学生山岳聯盟報告　第五号　三九
霧の旅（松井幹雄）　四〇
Herzog, Der Kampf um die Weltberge　四五
Bechtold, Deutsche am Nanga Parbat.　四七
アルプス文学　四八
Bruce, Himalayan Wanderer　四九
Ward, A Plant Hunter in Tibet.　四九
巓　第五号（丸善山岳部）　五〇
日本北アルプス地方地図　五〇
陸地測量部発行新刊地図目録　四～一六、一八、二一～二六、二八～三三、三五、三八、三九、四一～四三、四六～四八
スキー写真術（柴崎高陽）　五三
北越雪譜（鈴木牧之）　五四
日本九峯修行日記（野田成亮）　五五
The Spirit of the Hills (F. S. Smythe)　五六
Everest: The Challenge (Sir F. Younghusband)　五七
Willo Welzenbachs Bergfahrten (Akademischen Alpenverein München)　五七
A Pic Dolomites (G. F. Girard)　五七
The Structure of the Alps (L. W. Collet)　五七
Die Weisse Kordillere (P. Borchers)　五七
Akademischer Alpenclub Bern, 30. Jahresbericht　五七
Climbing Days (D. Pilley)　五七
Round Mystery Mountain (N. Watson, E. King)　五七～五九
Alpine Journal, Vol. XLVIII No. 252 (1936)　五八
Himalayan Journal, Vol. VIII (1936)　五八
アルプス登攀記・上（浦松佐美太郎訳）　五八
谷川岳（東京登歩渓流会）　五九
The Pilot's Book of Everest (L. Clydesdale)　五九
日本アルプス案内（冠松次郎）　六〇
単独行（加藤文太郎遺稿集）　六〇
American Alpine Journal, Vol. 2 No. 4 (1936)　六〇
Canadian Alpine Journal, 1934～1935 Vol. XXIII.　六〇
Roman Alpine Routes (W. W. Hyde)　六〇
Sierra Club Bulletin, Vol. XXI No. 1 (Feb. 1936)　六一
Harvard Mountaineering, No. 4 (June 1936)　六一
炉辺　第六輯（明治大学山岳部）　六一
登高行　第十輯（慶応義塾山岳部）　六一
ウム・デン・カンチ（慶応義塾山岳部訳）　六二
新版・日本風景論（志賀重昂）　六二
Alpine Journal, Vol. XLVIII No. 253 (Nov. 1936)　六二
日本風景論（志賀重昂）　六五
Scrambles amongst the Alps (E. Whymper)　六五
My Climbs in the Alps and Caucasus (A. F. Mummery)　六五
Geographical Journal, Vol. LXXXIII No. 6 (1936)　六五
伊那谷・木曾谷（細井吉造遺著）　六五
Alpine Journal, Vol. XLIX No. 254 (May 1937)　六六
山・原野・牧場（坂本直行）　六七
Himalayan Journal, Vol. IX (1937)　六七
立教大学山岳部部報　第八号　六九
針葉樹　第九号（東京商大山岳部）　六九
ナンダコット登攀（竹節作太）　六九
一登山家の思ひ出（尾崎喜八訳）　七〇
アルプス記（松方三郎）　七〇
Unknown Karakoram (R. C. F. Schomberg)　七一
蒙古高原横断記（東亜考古学会蒙古調査班）　七一
紫岳　第七号（静岡高校山岳部）　七二
Himalayan Campaign (P. Bauer)　七二
Everest The Unfinished Adventure (H. Ruttledge)　七二～七三
Camp Six (F. S. Smythe)　七二
The Mountain Scene (F. S. Smythe)　七二
雪庇（随筆集）　七二
ヨッホ　第三号（慈恵医大山岳部）　七二
Auf Kundfahrt im Himalaja (P. Bauer)　七三
山岳展望（深田久弥）　七四
パミール翔破（永淵三郎訳）　七九
Snowshoes (S. Davidson)　七九
稜線　第二号（下関山岳会年報）　七九
山の人達（高橋文太郎）　八〇
氷・岩・ランプ（高須茂訳）　八一
北大山岳部々報　第六号　八一
山路の旅（田部重治）　八一
図説・新スキー術（馬場忠三郎）　八三
雪線　第十四号（大阪商大山岳部）　八三
会報　第三号（仁高山岳会）　八三
わらぢ　第四号（松本高校山岳部）　八三
紫岳　第八号（静岡高校山岳部）　八三
Blank on the Map (E. Shipton)　八五
仏蘭西山岳会々誌より（藤島訳）　八六
天災と国防（寺田寅彦）　八六
北京より莫斯古へ（高山洋吉訳）　八六
ヴンデルング（尾崎喜八訳）　八六
立山・剣岳（小笠原勇八）　八七
日光・鬼怒高原（矢島市郎）　八七
岩と氷雪への登攀技術（海野治良・高橋照）　八七
仏蘭西山岳会々誌より（藤島訳）　八八
氷雪に挑む（朝日新聞社編）　九二～九三
関西学生山岳聯盟報告　第八号　九二
針葉樹　第十号（東京商大山岳部）　九二

わらぢ　第五号（松本高校山岳部）　九二
雪線　第十五号（大阪商大山岳部）　九二
ゴビよりヒマラヤへ（筧太郎訳）　九三
Five Miles High (R. H. Bates)　九三
ヒマラヤの伝説（藤木九三編）　九三
The Throne of the Gods (A. Heim)　九四
トルキスタンへの旅（タイクマン著・神近市子訳）　九五
砂漠の蒙疆路（ラテモア著、西巻周光訳）　九五
登山家に必要な救急処置（浅井東一）　九五
Die Alpen（一九四〇年一、二月号）　九五
山（辻村太郎）　九六
Alpine Journal (Vol. LII. May, 1940)　九六
Geographical Journal (Oct. 1939—May, 1940)　九六
東京市山岳部年報（4）　九七
Peaks and Lamas (M. Pallis)　九七
山岳省察（今西錦司）　九七
秩父山塊（原全教）　九七
谷川岳・仙ノ倉・苗場山（海野治良）　九七
名古屋高商山岳部々報　第十四号　九七
Ladies' Alpine Club : 1940　九七
Geographical Journal, June 1940 (Vol. XCV No. 6)　九八
同　July 1940 (Vol. XCVI No. 1)　九八
アルプス紀行（増訂新版）（チンダル、矢島祐利訳）　九八
東京付近山の旅（新版）（高須茂編）　九八
丹沢の谷歩き（坂本光雄編）　九八
山岳語彙（岩科小一郎）　九八
Himalayan Journal, Vol. XII (1940)　九九
中央アルプス・乗鞍・御岳（山下一夫）　九九
東京帝大スキー山岳部部内雑誌（一九三九）　九九
エーデルワイス　十号（関西学院大学山岳部）　九九
Arctic and Antarctic (Bertram)　一〇〇
リュックサック　第九号　一〇〇
台湾山岳　第十一号　一〇〇
陸地測量部新版地図目録　六九、七〇、七一、七三、八〇、八二、八三、八六

八　集会記事

定例理事会　五一～六三、六五～六六、六八～七七、八一～九六、九八～一〇〇
役員総会　五一、六三、七七、八三、八九、九〇、九一、九三、九三、九九
年次大会
昭和十年度
（講演　山風と気圧　藤原咲平氏、山の地理　辻村太郎氏）　五三
昭和十一年度
（講演　ナンダ・コット登攀　堀田弥一氏、湯浅巌氏）　六三
昭和十二年度　七二
昭和十三年度
（講演　松浦武四郎に就いて　横山健堂氏）　八三
昭和十四年度　九二
小集会
第七十回（山の写真につきて　額田敏氏）　五一
第七十一回（関西）（吉野郡名山図誌に就いて　笹谷良造氏）　五三
第七十三回（内蒙古の風物　江上波夫氏）　五八
第七十九回（ナンダ・コット登攀　山懸一雄氏）　六五
第八十回（山間のアイヌ語　金田一京助氏、越後猟師の話　高橋文太郎氏）　六七
第八十一回（関西）（山岳遭難救援相互組合に就て）　七二
第八十二回（関西）（内蒙古紀行　加藤泰安氏、カラコラム横断　本多恵隆師）　七三
第八十三回（日本登山史の展望—大峯山塊を中心として　笹谷良造氏）　七六
第八十四回（冬のチャハル、綏遠征について　黒田正夫氏）　七七
第八十五回（支那の山とその国民性　後藤朝太郎氏）　七九
第八十六回（スイス雑談　藤島敏男氏）　八〇
第八十七回（蒙疆の地理　多田文男氏、浅井辰郎氏）　八五
第八十八回（台湾高山探検の結果並に今後の登山　沼井鉄太郎氏）　八七
第八十九回（関西）（山岳と戦争　青井竹三郎氏）　八八
第九十回（関西）（支那奥地事情　北村住逸氏）　八八
第九十一回（西部カナダの新高山岳風景　東良三氏、寒中富士山頂滞在談　岡順次氏）　九〇
第九十二回（関西）（カナダ山岳の近況　東良三氏）　九一
第九十三回（北大山岳部員ベテガリ岳遭難に就て　初見一雄氏）　九三
第九十四回（関西）（スイス雑談　藤島敏男氏）　九五
第九十五回（明神岳東稜に於ける一つの試み　関根吉郎氏、北穂高滝谷　大塚武氏）　九五
第九十六回（タナダの山山見　西堀栄三郎氏）　九九
有志晩餐会その他
第三回　山岳懇談会　五四
関西支部有志晩餐会（十一年四月）　五七
会員有志晩餐会（十一年五月）　五七
立大ヒマラヤ隊歓送会　五八
会員有志晩餐会（十一年十一月）　六〇
立教遠征隊歓迎晩餐会（大阪）　六二
立大ヒマラヤ隊歓迎会　六三
会員有志晩餐会（十二年四月）　六六
関西支部学聯懇親晩餐会（十二年七月）　六八
会員有志晩餐会（十三年五月）　七八
同　（十三年十一月）　八四
同　（十五年四月）　九四

〈会報編集者〉

昭和五年	浦松佐美太郎
昭和六年	浦松佐美太郎
昭和七年	角田吉夫　神谷恭
昭和八年	額田敏　福島昌夫
昭和九年	額田敏　逸見真雄
昭和十年	額田敏　逸見真雄　桜井信雄
昭和十一年	松方三郎　逸見真雄
昭和十二年	中屋健弐　中司文夫　角田吉夫
昭和十三年	角田吉夫　吉沢一郎
昭和十四年	吉沢一郎　石原巌
昭和十五年	石原巌　塚本繁松　青木昇　交野武一　望月達夫　中村謙　田辺主計　吉田竹志　吉阪隆正